



Title	紫上の論 : 中の品の女性として
Author(s)	胡, 秀敏
Citation	詞林. 1988, 4, p. 25-33
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/67260">https://doi.org/10.18910/67260</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 紫上の論

— 中の品の女性の女性として —

胡 秀敏

紫上はいうまでもなく源氏物語の主要登場人物である。彼女は六条院春の御方として世に讃えられ、憧れの対象となった。六条院での紫上の位置の重さは、藤裏葉巻の賀茂祭見物の場面に、はっきりと窺える。

対の上、御形にまうでたまふとて、例の御方々いざなひきこえたまへど、なかなか、さしも引き続きて心やましきをおぼして、誰も誰もとまりたまひて、ことことしきほどにもあらず、御前なども、くだくだしき人数多くもあらず、ことそぎたるしも、けはひことなり。祭の日の暁にまうでたまひて、かへさには、物御覧すべき御棧敷におはします。御方々の女房、おのおの車引き続きて、御前、所占めるほどいかめしう、かれはそれと、遠目よりおどろおどろしき御勢なり。大臣は、中宮の御母御息所の、車押し避けられたまへりしをりのことおぼし出でて（後略）（四・二九三）

六条院には、紫上に肩を並べる方とてなく、簡略にした参詣というのに、牛車を二十輛も連ねた紫上の豪勢を示している。

しかし、紫上の地位は光源氏の愛情によってのみ支えられるものであって、世の公認するものではない。紫上の栄華は「ろうろうじ」さを發揮し、嫉妬を交えつつも他者との調和を図り孤児性を克服したところに築き上げられたものであった（一）。たしかに藤裏葉巻における紫上は女性として当代の脚光をあびる存在となったにもかかわらず、自分より高貴な女性が出現する度に、定まらぬ地位による敗北の不安に脅かされる。このような紫上について、その血筋としては上の品であって、育った境遇としては中の品であるという指摘はこれまでいくつかなされたが、品の分類で、紫上が中の品として取り上げられることはほとんどなかったと言つてよい。しかし、紫上はその育った境遇だけではなく、物語全体の流れにおいて中の品の存在として描かれているのではないかと思う。

帚木巻の雨夜の品定めでは、女性を上、中、下の三つの品に

分け、もっとも魅力があるのは中流の女性であるとする。中の品の一応の分類基準として、受領階級のほかに「なりのぼれ」るものと「おとろへ」るものが掲げられている。

なりのぼれども、もとよりさるべき筋ならぬは、世人の思へることも、さはいへどなおことなり。また、もとはやむことなき筋なれど、世に経るたつき少なく、時世にうつろひて、おぼえ衰へぬれば、心は心としてこと足らず、わろびたることどもいでくるわざなれば、とりどりにことわりて、中の品にぞ置くべき。

馬の頭の判断は中の品を流動的なものとしており、判断そのものが柔軟性をもっていることは、馬の頭が、

受領と言ひて、人の国のことにかかずらひいとなみて、品定まりたるなかにも、またきざみきざみありて、中の品のけしうはあらぬ、遅り出でつべきころほひなり。(一・

五〇・五一)

と中の品をさらに細分していくことによっても知られる。

「時世にうつろひて」衰えたものについて、『孟津抄』は次のように注釈している。

根本は上臈なれど世に経るたつきなければ時世のおぼえもおとろふるならひ也これは種姓よき人の位みじかくなるをいふべし末つむにあたる也これは種姓のくだるたとへ也うつせみも納言の子ながら受領の北方になればあたるべきにや(『孟津抄』上・四八)

源氏物語において中の品の女と言え、従来空蟬や夕顔が挙げられるほかに『孟津抄』の考えているように「やむことなき筋」ながら、世のおぼえ、衰えかけた存在として、末摘花が該当する。中の品の範囲は以外に伸び広がる可能性を秘めているように思える。

帚木巻において馬の頭が、思いかけないところに思いの外の美しい人がいるのを見出ししたのは、限なくめずらしく思われると語る。空蟬は決して美しい人とは言えない。しかし彼女は人柄の聰明さと爽やかな出所進退によって、その容姿の欠点が十分に取り繕われているのである。空蟬は故衛門の督の娘で、生前父は宮仕えに出そうとまで考えたことがあったが、受領の伊予の介の後妻となったから馬の頭の定義からするならば、空蟬は典型的な中の品の女ということになるのである。夕顔は故三位中将の娘であり、わが身の置きどころもなく、頭中将の許から身を隠さざるを得ない人であった。その出自運命を考慮するならば彼女も典型的な中の品の女性である。末摘花は故常陸の宮の姫君として「もとはやむことなき筋」の人物であったが、「世に経るたつき少なく」だったので、雨夜の品定めで、中の品にも含めた上流の没落組にあたるのである。

では主要登場人物の紫上はどうであろうか。たしかに親王の女という出自から言えば紫上は上の品に属するべきである。また、春の町の女主人として、四季の町、六条院を幸領し、光源氏の寵を一身に集める、後の紫上の栄華の姿には、中の品の女

としての影はすこしもみえない。しかし、孤児同然の身分で光源氏に引き取られた当初の紫上は、葵上あたりの女房たちから「二条院には人むかへたまふなり」（紅葉賀巻）と、どこ誰とも知らない女のように取り沙汰されたのである。紫上は親王の女という高貴な素姓であるが、幼くして母をなくし、父宮と離れて北山に祖母と隠れ棲むという点からみれば、「もとはやむごとなき筋なれど、世に経るたつき少な」い中の品の女と言えよう。このような紫上は二条院に引き取られてから、光源氏のもてなしによって光源氏とともに榮華の階段を上っていく。しかし、紫上は高貴な女性に社会的に認められた女性が現れたら、速座にも揺らいでしまうにちがいない不安定さの中に終始置かれている。こういう点では、若紫巻から若菜巻まで作者の基本設定が貫かれている。彼女が非常に敏感に光源氏の心の動きに反応を示し、すばやく嫉妬するものと描かれてくるころにも紫上の置かれている位置の一端が窺えるのである。この点は明石上、朝顔齋院が現れるような事件、さらに第二部、若菜上巻以下の女三宮の光源氏への降嫁という事件の設定によって照らし出されることになろう。

## 二

幼い時から理想の女性として光源氏自らの手で育てられた紫上は、葵上の死後、正妻に準ずるような地位を保ち、平和に暮

らしていた。しかし、明石上が現れたときや、光源氏の関心が朝顔齋院に集中されたとき、彼女の地位は危機を迎えたが、前者は娘を養女とすることによって、後者は朝顔齋院の拒否という形で救われた。それでも彼女は、はかない生い立ちのため、屈辱感に耐えていなければならない。さらに、女三宮の降嫁は彼女に決定的な打撃を与えた。

源氏物語には、明石上、朝顔齋院、女三宮が現れたときの紫上の動揺についての叙述は何箇所もある。この三つの事件の設定によって、作者は光源氏のもてなしだけで「上」へなりのほれた紫上にその地位の不安定さを痛烈に思い知らせるのを用意しているように思われる。まず、明石上が現れた時、

「はかなきことにて人に心おかれじと思ふも、ただ一つゆゑぞや」とて、箏の御琴引き寄せて、掻き合せすさびたまひて、そのかしきこえたまへど、かのすぐれたりけむもねたきにや、手も触れたまはず。いとおほどかにうつくしう、たをやぎたまへるものから、さすがに執念きところつきて、もの怨じしたまへるが、なかなか愛敬つきて腹立ちなしたまふを、をかしう見どころありとおぼす。（三・二一四―二一五）

と描かれている紫上の嫉妬には、まだすねてみせるという余裕がある。出自から言えば、明石上が受領の女という点において、紫上に比べてはるかに劣るわけである。したがって紫上は女としては明石上を愛情のライバルとして肌身に感じていたであらう

うが、明石上の登場は、彼女の光源氏の正妻に準ずる座を奪うというほどの脅威にはなりえない。

ところが、同じ朝顔巻で、朝顔齋院に対する昔からの光源氏の執心が再び頭をもたげ、世間でいろいろ取り沙汰されるのを耳にしたときの紫上の不安は、明石上の件に比べるとはるかに深刻なものである。

同じ筋にはものしたまへど、おぼえことに、昔よりやむごとなく聞こえたまふを、御心など移りなば、はしたなくもあべいかな、年ごろの御もてなしなどは、立ち並ぶかたなくさすがにならひて、人に押し消たれむこと、など、人知れずおぼし嘆かる。かき絶え、名残なきさまにはもてなしたまはずとも、いとものはかなきさまにて見馴れたまへる年ごろのむつび、あなづらはしきかたにこそあらめ、など、さまざまに思ひ乱れたまふに、よろしきことこそ、うち怨じなど憎からず聞こえたまへ、まめやかにつらしとおぼせば、色にも出だしたまはず。(三・一九七―一九八)

この紫上の切実な不安動揺は朝顔齋院が、出自も世の勢望も立ちまさっているという事実からきたものである。朝顔齋院は桐壺帝の兄弟宮の正妻(2)の姫君で、同じ親王の女ではあるが、紫上は嫡出ではない。しかも光源氏に引き取られたときは孤児同然の境遇であった。このような紫上の存在を無視したような発言をしたのは女五宮という人物である。

この大臣、かくいとねむごろに聞こえたまふめるを、何か、

今はじめたる御ころさしにもあらず、故宮も、筋異になりたまひて、え見たてまつりたまはぬ嘆きをしたまひて、

「思ひ立ちしことをあながちにもて離れたまひしこと」などのたまひて出でつつ、悔しげにこそおぼしたりしをりありしか。されど、故大殿の姫君ものせられし限りは、

三の宮の思ひたまはむことのいとほしさに、とかく言添へきこゆることもなかりしなり。いまは、そのやむごとなくえさらぬ筋にてもせられし人さへ亡くなられにしかば、げに、などてかは、さやうにておはせましもあしかるまじ。

(後略) (少女、三・二一八―二一九)

と朝顔齋院に光源氏との結婚を勧めるのである。

光源氏が朝顔齋院に執心する噂を耳にする紫上は、顔色には出さぬものの、真剣に思い悩むのであった。この人と光源氏との婚姻の可能性は、紫上にとって今までの正妻に準ずる地位への根本的な脅威である。動揺の深刻さは明石上のときの比なのである。この恋も結果として、朝顔齋院の拒絶によってたち消え、紫上の苦悩と不安は杞憂となったが若菜巻における女三宮降嫁のことは、従来とは全く違って、決定的な打撃を受けることになった。

紫上は光源氏から女三宮降嫁のことを聞いて、

あはれなる御ゆづりにこそはあなれ。ここには、いかなる心をおきたてまつるべきにか。めざましくかくてなど咎めらるまじくは、心やすくてもはべなむを、かの母女御の御

方ざまにても、うとからずおぼし数まへてむや。(五・四

#### 四〇四五)

と言っている。そして、女房たちには、

この宮のかくわたりたまへるこそめやすけれ。なほ童心の  
失せぬにやあらむ、われもむつびきこえてあらまほしきを、  
あいなく隔であるさまに人々やとりなさむとすらむ。ひと  
しきほど、劣りざまなど思ふ人にこそ、ただならず耳たつ  
ことも、おのづから出で来るわざなれ、かたじけなく心苦  
しき御ことなめれば、いかで心おかれたてまつらじとなむ  
思ふ。(五・五七〇五八)

などと述べている。紫上は、女三宮の降嫁は光源氏の希望どお  
りで結構なことであり、身分が自分とは違いすぎ、妻の座を競  
い争う相手ではなく、親しくおつきあいさせていたたくつもり  
だ、とおだやかに述べるわけであるが、実際はそうはいかない。  
女御入内に準じた調度品が飾り立てられ、当日は女三宮の車に  
上達部達が大勢つき添って美しい輿入れが行われ、三日間ほど  
は、朱雀院側からも、六条院側からも、盛大優雅な催しことが  
続く女三宮の華やかな婚儀を身近に見聞きしては、紫上は平靜  
ではいられない。

年ごろさまやあらむと思ひしことどもも、いまはとのみも  
て離れたまひつつ、さらばかくてこそはとうちとけゆく末  
に、ありありて、かく世の聞き耳もなのめならぬことの出  
で来ぬるよ。思ひ定むべき世のありさまにもあらざりけれ

ば、今よりのちもうしろめたくぞおぼしなりぬる。(五・

#### 五六〇五七)

という光源氏の妻として甚だあやうげな位置にさらされている  
己が身を、改めて深く認識するところであった。自分より高貴  
な女三宮の降嫁という事実を直面して、紫上は平靜でいられる  
はずのものでない。身分は絶対の力である。紫上は親王の姫君  
で、女三宮は先帝の皇女である。その格差はどうする。こともで  
きない。それに、紫上と光源氏の仲に比べて院の帝との間に格  
式をもって取り決められた女三宮は正妻として世に公認される。  
女三宮の背後にある朱雀院と兄弟の後見の重さに比べて、正式  
の婚儀をさえ挙げ得なかった自分の境遇との大差を厳しく突き  
つけられる。紫上は、光源氏にとって最上の女性であったにも  
かかわらず、世間的にも、事実上にも妻としての座を女三宮に  
譲らなければならない。

この女三宮問題がおこる前、藤裏葉巻における紫上は、女性  
として当代の脚光をあびる存在と言えた。后がねとして育てた  
明石姫君入内に打ち添い、輦車で退出する。

出でたまふ儀式の、いとことによそほしく、御輦車などゆ  
るされたまひて、女御の御ありさまに異ならぬを、(後略)

#### (四・二九八)

と、当時の紫上は世に敬慕されるような存在であったと言えよ  
う。しかし、このような堅固な立場に置かれていても、結婚の  
そもその形の異常さ、母方の後見を全く失った身のほどは紫

上にとつて生涯の負目となつて、高貴な女性が現れたところであつて、徹しく回顧されることになつたのである。

一方、これまでの光源氏は身分が高貴であるだけのために、女を尊び、愛することが全くないのである。いとしく思う女性のみを愛するという光源氏の一貫したあり方から言へば、たとえ藤壺のゆかりであるがゆえに心動いたにもせよ、正妻として、女三宮を迎へることは明らかに異例である。この光源氏の行為は「やむごとなき御願ひ深」いからこそ行われるものであると思われれる。若菜上巻で、光源氏が、

さるは、この世の栄え末の世に過ぎて、身に心もとなきこととはなきを、女の筋にてなむ、人のもどきをも負ひ、わが心にも飽かぬこともある。(五・二四)

と述懐しているところを、『岷江入楚』所引の三条西実隆の秘伝として

源の自称也我身の上不足なる事はなきを本台のしかくとなきのみ不足なると也紫上も人からはよけれともしきくゝにむかへ給へる本妻にはあらず

と光源氏の「あかぬ」心中の所以を説明している。

紫上の出自は劣り腹の皇孫で、皇女の女三宮に比べて、一段と劣るわけである。女三宮の高貴をもつてすれば、最愛の紫上といえども、肩を並べることができない。妻としての長い実質と光源氏のさまざまなもてなしにもかかわらず、紫上は準太上天皇となつた光源氏の配偶者として世間では認めがたいのであ

る。

### 三

女三宮の婿えらびは、朱雀院が左中弁や女房達の提案をまゝめた上で決めたものである。この婿えらびに重要な役割を果たした左中弁は内親王の降嫁について、紫上の存在に少々危惧しつつも、光源氏が現世の榮華に不足はないが、不満に思うこともあり、いつも内輪の冗談話にはそのことを口にしていて、家司ならではの真相をつげる。光源氏の不満を、左中弁は

「げにおのれらが見たてまつるにも、さなむおはします。かたがたにつけて御蔭に隠したまへる人、皆その人ならず立ち下れる際にはものしたまはねど、限りあるただ人どもにて、院の御ありさまに並ぶべきおぼえ具したるやうはおはすめる。それに、同じくは、げにさもおはしまさば、いかにたぐひたる御あはひならむ」(五・二四)

と判断する。榮華をきわめた準太上天皇光源氏の妻として、花散里や明石上はもちろんのこと、紫上さえも「かぎりあるただ人ども」で、不釣合であり、女三宮こそ準太上天皇という身分に並び得ると解するのである。

一方、左中弁から朱雀院の伝言をきいたとき、光源氏の姿勢はどうなのか、それは次の言葉によく窺える。

かく取り分きて聞きおきたてまつりてむをば、ことにごそ

は後見きこえめと思ふを、それだにいと不定なる世の定め  
なさなりや。(五・三二)〜(三三)

と光源氏は院からの依頼を強調する。彼は、自らの意志による  
ものではなく、あくまでも院からの懇請により引き受けるとい  
うポーズをつくりあげる。そして、

中納言などは、年若く軽々しきやうなれど、行く先遠くて、  
人柄も、つひに朝廷の御後見ともなりぬべき生ひ先なめれ  
ば、さもおぼし寄らむに、などかこよなからむ。されど、  
いといたくまめだちて、思ふ人定まりにてぞあめれば、そ  
れに憚らせたまふにやあらむ。(五・三三)

と、光源氏は、老いた自分は不適當であるが、夕霧は将来性、  
人柄からみてもふさわしいという。それは、院がすでに夕霧を  
断念したことを承知の上で、あえて言っていることはあきらか  
である。光源氏はいかにも自分の代わりに夕霧を推薦したいと  
いう姿勢を示しているようであるが、しかしこの推薦の仕方は  
あまり積極的でない(3)。夕霧は適當だが、しかし彼には例  
の雲井雁がいると自分で推薦したあと、すぐまた否定するとい  
うところに光源氏のずるさを指摘するのは容易である。表面に  
は、彼はあくまでも消極的な受け身の立場にあったが、実際には  
女三宮の降嫁に対する光源氏の積極性も潜んでいるように思  
われる。

依頼主の朱雀院側からみれば、事情がまたちがってくる。朱  
雀院が女三宮の婿がねを選択するとき、院の脳裏には、源氏君

と紫上とのことがあらまほしきことと想起された。

六条の大殿の、式部卿の親王の女生ほし立てけむやうに、  
この宮をあづかりてはぐくまむ人もがな。(五・二〇)

昔、源氏君が幼い紫上を引きとり、やがては六条院の女主人公  
となり得るまでに養育したように、女三宮を迎えて育ててくれ  
る人物をと思案されているのである。いろいろと検討の後、結  
局、院は女三宮を光源氏に託することにする。東宮も院の決意  
を妥当な帰結として、「かの六条院にこそ、親さまに、ゆずり  
聞えさせ給はめ」と賛意を表される。東宮の、女三宮を光源氏  
に「親さまにゆずり」という考え方は、院の「この宮をあづか  
りてはぐくまむ人」という思惟と趣旨を同じくしているといえ  
るであらう。

朱雀院は、光源氏を婿にというのではなく、女三宮の教育を  
ゆだねたのである。女三宮にあって、光源氏——紫上のような  
関係をつくりたいのである。このことについて、若菜上巻で、  
紫上が女三宮と対面する場合での中納言の乳母の発言からも立  
証することができる。対面の場では紫上は、幼げな女三宮を親  
めいてやさしくいたわり、話題には「昔の御筋」——女三宮の  
母君と自分の父とが兄妹であることを取り上げた。宮が返答で  
きないとき、中納言の乳母は、宮に代わって、

背きたまひにし上の御心向けも、ただかくなむ御心隔てき  
こえたまはず、まだいはけなき御ありさまをも、はぐくみ  
たてまつらせたまふべくぞはべめりし。うちうちにもさな

む頼みきこえさせたまひし。(五・八一)

と、宮の教育をお願い申し上げるのが父君朱雀院の望みであり、当人もそれを頼みとしている旨を丁寧に答えた。

朱雀院と光源氏との間には「親さまに」という点で微妙なくいちがいがある。光源氏には、今を時めく準太上天皇にふさわしい身分の姫君をほしがっているからこそ、院と東宮の意向を都台のいいように受け取って、たとえどんなに幼くても、女三宮の降嫁を早くも快く引き受けたわけである。

#### 四

以上、源氏物語において、紫上の妻の座の揺れ動いた状況をみてきたことになる。一体妻の座は如何なるものであろうか。言われるように正妻は、男の身分に相応する家の姫君が選ばれるわけであるが、さらに男の身分が高くなれば、正妻もそれ相応の女性に換えるべきだという習俗があったようである。女三宮の降嫁ひにあたって、朱雀院が中納言の君夕霧にその内意をほのめかされるとき、夕霧は、

「さやうの筋にや」とは、思ひぬれど、ふと、心得顔にもなにかは答へ聞えさせむ。ただ、「はかばかしくも侍らぬ身には、よるべも、さぶらひ難くのみなむ。」(五・七二)と、「たしかなたよりもない身の私には、妻もなかなか見つからない」と答えている。夕霧はこの四月、長年の思いが叶って

雲井雁と結婚したばかりであるのに(藤裏葉巻)こう答えるのはやはり官位の上昇とともに身分の高い姫君を新たに正妻として迎えたい気持ちが潜んでいるからであろう。光源氏も準太上天皇となったから、紫上は身分上妻としてふさわしくないと思つて高貴な内親王女三宮を正妻として迎えたのであろう。

源氏物語の流れに沿ってみれば、紫上は光源氏に引き取られるから明石上が現れるまで光源氏の「上」へ「なりのばれ」たことがわかる。しかし、己れの身のほどを回想してくるような紫上の境遇は一貫して物語の中で語り続けられた。明石上の場合は、姫君を自分の手許に引き取るというところで、はっきりした形をとって勝負はついたのである。しかし、朝顔斎院が再登場して紫上を根底からつき揺るがすのであり、それは明石上の姫君を得て不動のものになったに見えた妻の座が、実は見せかけの安定でしかなかったことを紫上に思い知らせたのである。藤裏葉巻で、明石の姫君の内内に付き添った紫上が女御に準ずる待遇を受けるはえはえしさが語られた直後に、急転して女三宮の降嫁が決定するのである。紫上はつねに動揺の中を生きていた。清水好子氏は次のように説かれる。

周知のように、紫上は正夫人ではなく、光源氏の群妾の一人にすぎない。女は、愛の勝利を求められ、権勢欲もある。男の愛情だけを頼りに、日蔭者の卑下と不安の中で暮らすより、正妻として社会的にも認められることがより願わしい結婚であつたらう。

だが、それにはたがいに釣り合う身分と、女の家の権勢や財力が必要である。紫上の身分（親王の庶子）はさほど悪くないが、父親王に認められた結婚ではなかった。すなわち、家と家との堂々たる結婚ではなかったのである。こういう結婚は社会的実益（昇進とか富裕）が引き出されないから値打がない（4）。

たしかに紫上の生の安心感は一親の窓の内ながら、すぐし給へるやう」に顧慮する光源氏の愛情に依存していたのである。しかし、いくら光源氏の愛情が深くても、それ自体にはどのような客観性があるのであろうか。いわばこれほど不確定でたよりないものはないのだと言えよう。そのことは、女三宮が光源氏の正妻として六条院に迎えられるという事実に向面したときに紫上ははっきりとつきつけられたのである。

源氏物語の作者は、上流の女性たちにはあまり関心と熱情をもたなかったようにみえる。光源氏をめぐる女性としては、葵上、朧月夜、女三宮はそれぞれ権門の出であったり、先帝の姫であるから、これらの人々は上の品と言えらると思う。光源氏は空蟬や夕顔といった典型的な中の品の女性に魅力を感じ、葵巻で、成熟した紫上と新枕を交わし、やがて花散里、明石上を加えて、独自の秩序世界を形成していくが、これら伴侶たちが葵上、朧月夜、六条御息所といった「品」と「かたち」を具備した「やむごとなきよすが」を退けたところに求められているところに、作者が紫上を中の品の一人として設定した意図の一端

も窺えるのではないかと思う。紫上は、空蟬や夕顔といった典型的な中の品とはおもむきを変えた流動性に充ちた中の品の女の物語と言えるのではないか。

注

(1) 渡辺仁史「紫上の愛―『源氏物語』第二部における役割と意義―」（『日本文芸論叢』第一号、昭和五八年三月）  
(2) 朝顔斎院は齋院を退いてから父宮の桃園宮に住むところから考える。

(3) 玉上琢弥『源氏物語表釈』（第七巻・六七頁）

(4) 清水好子「紫上」（『源氏の女君』増補版、五四〜五五頁、塙書房刊）

※本文引用は新潮日本古典集成『源氏物語』一〜八に拠る。  
(本学大学院博士前期課程)